

2024年1月6-7日

第10回日本スポーツ理学療法学会学術大会

参加者：鶴田 崇、烏山 昌起

【学会参加の概要】

2024年1月6-7日にかけて埼玉県のソニックシティで開催された第10回日本スポーツ理学療法学会学術大会に当院から鶴田崇(理学療法士)、烏山昌起(理学療法士)が参加しました。今年度は対面での開催となりました。本学会は、スポーツ分野に関する研究発表が募集され、当日は1,100名を越える参加者が集まりました。当院からは、鶴田・烏山の演題が採択され、発表と意見交換を行うことができました。



投球障害肩を呈した投手の 野手併用の有無は治療経過に影響するか

○鶴田 崇¹⁾、烏山 昌起¹⁾、山口 亮¹⁾、内田 順己¹⁾、
緑川 孝二²⁾、南川 智彦²⁾
1) 南川整形外科病院 リハビリテーション部
2) 南川整形外科病院 整形外科

○発表者：鶴田 崇

小中学生の野球肩を呈した投手は、投手のみで復帰を目指した選手より、野手を経て投手として復帰を目指した方が柔軟性はより改善することが示唆されました。成長期である小中学生は、投球頻度や負担が多く投球障害肩が生じやすい投手に固執するより、様々な動きを伴い投げる野手を併用して復帰を目指す方が、柔軟性を維持しながら早期に完全復帰すると思われます。

野球選手の投球障害に対する予防介入 スコーピングレビュー

烏山 昌起¹⁾ 鶴田 崇¹⁾ 河上 淳一²⁾
尾池 拓也³⁾ 内田 順己¹⁾ 南川 智彦⁴⁾

¹⁾ 南川整形外科病院 リハビリテーション科
²⁾ 九州栄養福祉大学 理学療法学科
³⁾ 田原整形外科医院 リハビリテーション科
⁴⁾ 南川整形外科病院 整形外科

○発表者：烏山 昌起

野球選手の投球障害に対する予防介入の内容と有効性のエビデンスをまとめました。その結果、肩後方組織のストレッチングや筋力トレーニング、上半身・体幹・下肢を含めた包括的なストレッチングやバランストレーニングは有効であり、特にトレーニングの遵守率が高いほど傷害発生率が減少することが分かりました。今回の結果を当院の障害予防の取り組みに還元できればと思います。

